

「思ひ出」一章(下) : 太宰治私注・稿

花田, 俊典
九州大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10415>

出版情報 : 文獻探究. 21, pp.26-47, 1988-03-25. 文獻探究の会
バージョン :
権利関係 :



「思ひ出」一章(下)

——太宰治私注・稿——

花田俊典

一—19 私の父は非常に忙しい人で、うちにゐることがあまりなかった。うちにゐても子供らと一緒に居らなかつた。私は此の父を恐れてゐた。(一三)

私の父 父源右衛門は西津軽郡木造村の松木家八代目の七右衛門(薬問屋)の四男として、明治四年六月に生まれた。旧名永三郎。明治二十一年八月三十一日、その利発さを買われて十七歳で新興商人地主津島家の婿養子となつたが、絶対的な家父長権のもとに大尽暮らしをしてきた松木家の当主の血筋をそのまま受け継いだような氣質の人であつた。長身で豪放磊落、酒を飲んでよく人を笑わせ、友人知己に渾名(あだな)をつける名人であつたとも言われている。幼少のころから強情なところがあり、養子に入つて間もなくのあたりから、津島家の貧乏くささと当主惣助の吝嗇な成り上り根性に反感を感じ、病弱だつた養父惣五郎の没後は大胆にも松木家の家風を積極的にとり入れたものだという。(略)／太宰の性格は、この父に負うところが多い。權威に対する生理的な反撥も、人並みはずれた道化も、金の濫費癖や人の意表をつくような発想も、すべて父源右衛門から受け継いだものと思われる。それでいながら、人一倍虚栄心が強く、常に周囲からチャホヤされていなければ機嫌が悪かつたという点でもよく似ていた。これに母たねから受け継いだ無気力な『自信の無さ』とそれから招来される『含羞の優しさ』とを加えれば、アブリオリな太宰の性格の原質はほぼ決まることとなる」(相馬正一『評伝太宰治 第一部』前出)。朝日新聞青森支局『津島家の人びと』(前出)は「金木から婿さんを見にきたとき、永三郎は、屋敷の裏

の小川のそばで、下駄をつくつていたそうです。足の裏に墨をつけて、型をとつていた、そのままの格好で、見合いの席に出たという話です。この松木の家ではあに(長男)が絶対で、おんじ(次男以下)は、もの数ではなかつた。永三郎も四男ですから、自分で下駄をつくつたり、使用人と同じような生活だったのでしよう」との松木家一族の松木秀彰の言を伝え、「永三郎は、このとき数え十八歳、九人兄弟の四番目であつた。茶目つ氣たつぶりの、利発な若者だつたという。(略)当時、五所川原の商家に手代奉公に出されていた。後年、津島家の定紋つきの黒塗りの馬車を乗り回すようになった源右衛門は、よく、『自分は帝大出でなくて手代出だ』といつて人を笑わせていたそうだ。そんな若者にとつて、この縁談は、手代生活から抜け出し、四男からいつきよに長男、家長の座に近づくチャンスと思えたのではなからうか」と述べる。永三郎は明治二五年夏、源右衛門と改名。同三〇年七月、金木銀行頭取。同三三年三月、家督相続。同三四年三月、県会議員補欠選挙に当選。同三六年九月、再選。同三七年、多額納税者番付第四位。同四〇年六月一日、新邸宅完成。同四五年五月、第一回衆議院議員総選挙に立憲政友会から立候補し、第三位で当選。「五尺八寸の体軀に、黒羽二重の紋付を着、宮様のように二頭立ての馬車を駆つた。アヤの興助が、奥羽本線大釈迦駅まで送迎したという。土地の人は、源右衛門を『金木の殿様』といつた。留守勝ちで、東京、弘前、青森等に旅し、家に居ても来客が多く、修治の相手になるようなことは、殆どなかつたという」(山内祥史「年譜」、『太宰治へ人物書誌大系

7<『前出』。一—7、一—35参照。註の父を恐れたる太宰

の高等小学校時の作文「僕の幼時」のなかに、「僕が一番家でこは

いものは父様であつた。故に父様の前では常に行儀よくして居た。

それ程こはい父様でもたまには又大そう好きになることもある。そ

れはよくびかく光つたおあしや、きれいな御本を呉れるからであ

る」とある。「光を脊から受けてゐるので」「まつくろに見えた」

父の「大きい姿」は、「私」における父の巨大で不可解な屹立する

権威者としての位置を象徴している。このイメージはとりもなおさ

ず、「私」を圍繞する世間の一面の具体化にほかならない。「父」

「母」「祖母」「兄」「姉」らはおよそ「私」にとつて家族という

よりむしろそれぞれの他者性をあらわにする存在として語られてゆ

く。が、その構図は必ずしも単純ではない。このあたり、東郷克美

「逆行と変身——太宰治『晩年』への一視点」(『成城大学短期大

学部紀要』四、昭48・1)は、「この父に対する恐怖は何に由来す

るものだろうか。それは多忙な政治家として留守がちであつた父へ

の疎外感のみではあるまい。これは家の内部で女たちにとりかこま

れて『面白く遊んでゐた』太宰の前に突如として『立ちほだかつ』

た外的現実の影とそれへの恐怖を物語っているのではないか。さら

に具体的に、父叔母不義妄想説の立場からみると、自分の大切な叔

母を犯し、母性を奪つた人に対する憎悪と恐怖の表象とみることも

できるだろう。(略)つまり現実というのはそのように不可解な男

性的世界であつたのである。家の外の恐ろしい男性原理の支配する

世界に対して、家の内側にあつて女たちの柔かく快いもの(それは

脆く不安定ではあつたが)にとりかこまれていゝのが幼年期

の太宰の世界の基本的構図だつたのではなからうか」と述べる。太

宰(「私」)にとつて父が屹立する「外的現実」にはかならなかつ

たとの指摘は首肯できるが、二、三の疑問も残る。第一に、「私」

は「家の内部で女たちにとりかこまれて『面白く遊んでゐた』」(東郷)のではなく、「弟」と二人で「米俵のぎつしり積まれたひろ

でそれを後景に浮かび上がらせる性向は、これ以後の太宰にもないのである。東郷の論法で読破するなら、「私」に親しい「叔母」も「たけ」も「上の姉」も「みよ」も、ことごとく「父」や「家長である兄」と縦横無尽のへ不義の関係をとり結んでいたかも知れないということになりかねない。ただ、わずかにこの「父叔母不義妄想説」が魅力をもつのは、「『犯された女』または『犯される女』として佇んでいるみよ」（水谷昭夫「太宰治と女性」）、「解釈と鑑賞」昭52・12）と叔母とをかさねてみせる見立ての場合だが、それとてかなり強引に叔母のへ不義を想定してしまう困難をおかさざるをえない。念のため言いそえておけば、へ不義の子とはあくまで太宰の、（あるいはかなり根づよく真実味をおびたものであったにしろ）疑念なり妄想とよぶべき思いであったので、いかなればそれは恰好の文学的素材でこそあれ、けつして確信そのものとはなりえていなかっただけなのである。その決定的な落差を、たぶん太宰は一度だって本気でのり越えようとしたことはない。なお、太宰における父の位相について、磯貝英夫「ナルシズム・反俗・道化の構図」（「解釈と鑑賞」昭49・12）は、「大家族を率領している地主の父親は、格別強固なベルゾナを必要としていたと思われるが、それは、父親によりそったことのない太宰にとつては、まったく了解不能のものであったようである」と推察し、「さらに、かれの下意識に即して言うならば、かれが恐ろしい人としてしか意識することのなかつた父親こそが、その『俗』の中核にはかならず、そして、それは、『津軽』にえがかれる長兄のおもかげにひきつがれるのであるが、この父から脊き出たという緊張感こそが、かれの創作のエネルギー源になつたわけである。しかも、それは、あまえを根底にもつた処罰願望を含んでおり、言いかえれば、逆説的な求愛であつたとも言えるのである」と述べている。ちなみに長兄文治は後年、「ご存知のように、修治とても最初から不良だつたというわけではありません。正直、わたしら五人の兄弟の中で、学業は一番できま

した。ですから親にしてみれば憎かろうはずがなく、特に父（源右衛門）は修治、修治といつて可愛がつておりました」（「肉親が親しめなかつた弟の小説」、月刊「噂」昭48・6）と回想している。

一—20 母に対しても私は親しめなかつた。乳母の乳で育つて叔母

の懐で大きくなつた私は小学校の二三年のときまで母を知らなかつたのである。下男がふたりかかつて私にそれを教へたのだが、ある夜、傍に寝てゐた母が私の蒲団の動くのを不審がつて、なにをしてゐるのか、と私に尋ねた。私はひどく当惑して、腰が痛いからあんまをやつてゐるのだ、と返事した。母は、そんなら揉んだらいい、たたいて許りゐたつて、と眠そうに言つた。私は黙つてしばらく腰を撫でさすつた。母への追憶はわびしいものが多い。（「一四」

戀 夕子（たね）。惣五郎とイシの長女として明治六年八月に生ま

れる。一五歳で永三郎（源右衛門）を夫に迎え、タマ以下の一人の子どもをもうけた。健康快活な妹キエにひきかえ、タマは生来病弱で神経質、ぐずだと母イシにいわれていたという。「濃厚病弱だつた母たね女から受け継いだ『やさしさ』と『素直さ』が、内側の氣質として太宰の性格を形成していることも見逃してはならない。

『母の愛は感じなかつた』と告白する太宰を、幼少時から誰よりもいたわり終生案じ続けていたのは、ほかならぬ母その人であつたからである。中学・高校時代に家人にかくれてひそかに下宿先へ贈り物してやつては太宰の身の周りの世話を依頼したり、最初の自殺未遂（昭和四年十二月十一日）の時もすぐ駆けつけて、ひと月近くも

弘前郊外の大鱒温泉に付ききりで湯治させてやつたのも母である。氣丈夫な叔母きゑ女と異なり、いつも祖母いし女に『無能者』とのしられ、実の娘でありながら日陰者のように泣いて暮らした氣弱な母を太宰として知らない筈はなかつたと思う」（相馬正一「太宰治と津軽と家」、「国文学」昭38・4、のち『太宰治と井伏鱒二』筑摩書房、昭47・2）。昭和十七年二月一〇日逝去。享年七〇歳。

太宰の作文「僕の幼時」には、「其の度毎に姉は母様に訴ふるけれども母はなんともいはぬ。若しこのことが少しでも叔母の知る所となれば叔母はだまつては居ない」とか、「叔母様に（小学国語読本を）引用者注）読んで見せると必ず昔話一つ知らせて呉れるし、おぼあ様に読んで知らせればお菓子を呉れる。母様の前で読んで何とも呉れない。たゞ僕の頭をなで、一番とれよと云つて呉れる」などとあつて、その雰囲気がうかがえる。乳母 未詳。「生母タ子が病弱であつたため、生まれて間もなく、乳母を付けられたが、それは、津軽のおやけ（資産家）のひとつの格式でもあつたという。一年足らずで乳母が去つた後は叔母キエに育てられた」（山内祥史「年譜」、『太宰治へ人物書誌大系7』）。「生まれてまもなく、北津軽郡中里町高根からきた、佐々木さよ（？）という人を乳母につけられた」（山内祥史「年譜」、桂英澄編『太宰治研究Ⅱ その回想』筑摩書房、昭53・6）とも。母を知らなかつた「乳母の乳をのみ、叔母のそばで育つたため、太宰は大きくなるまで、自分を叔母（きえ、母の妹）の子供だと思つていたのである」（森安理文『微笑の受難者 太宰治』社会思想社、昭49・4）と一般にいわれているが、うたがわしい。「私」に即していえば、「小学校の二三年のときまで」知らなかつたといひながら、一方で小学校入学直前に「叔母に貰われたのだと思つてゐた」（「八」と語つている。このゆればたぶん、いわゆる不義の子としての自己劇化の問題と絡んでいる。相馬正一『若き日の太宰治』（筑摩書房、昭43・3）は、「昭和十九年に『津軽』執筆の目的で故郷を訪れ、北辺の漁村小泊村で子守のたけ女に再会した時、その夜たけ女に向つて太宰は真顔で次のように尋ねたという。／＼私と文治さんは本当の兄弟か？／＼／＼私は五所川原のガツチャの子ではないのか？／＼／＼知つてゐるなら、どうか本当のことを教えてくれ。／＼／＼たけ女は半ばあきれながら、『ガツチャに育てられたことは本当だが、オガサの子に間違いない』と答へたら、半信半疑の表情で何度も『そうかなあそつか

なあ』とつぶやいたというのである」とタケの証言を伝え、「きえ女の長女りえ女（現存）は、太宰は一時期本当に自分をきえ女の子供だと思つていたし、きえ女もまたそう思わせていたと語つている」として、「呼称の面では確かに母と叔母―即ちオガサとガツチャを区別して用いてはいるが、それとてオガサが実母でありガツチャがその妹であるということ深く理解した上でのことではあるまいと思ふ。ただ周囲でそう呼んでいる習慣に従つたまでのことなのである」と述べる。が、それにしてもはりエら叔母の子どもたちまでもがタ子をオガサとよぶ「習慣」をもたされていたとは考えにくいし、もし「小学校の二三年のときまで」叔母キエを母親と信じ切つていたのなら、それがそうではないことを知つたときの衝撃がまったく痕跡をとどめていないことも納得しがたい。叔母の部屋で寝起きしていたのだから、いつしか叔母を母親と見なすようになったとしても不思議はないが、それはあくまで素朴な一時期の思い違い、いわゆる一種のよくあるエピソードにとどまる次元のものにすぎないのではないか。なにより肝要なのは、それを後年の太宰がいわゆる不義の子の疑念として方法化していったことだろう。そういう自己劇化を抜きにしてこのくだりをそのまま受けとることは、やはりさげすむべきだ。私にそれを教へたのだが「たけといふ女中から本を読むことを教へられ」（「四」）、「私に道徳を教へた」（「四」）、「弟の子守から息苦しいことを教へられた」（「九」）などの表現とあわせて、「私」の受身性、被虐性が浮き彫りにされる。この「私」は、おぼえるとはいわず、教へられたと語る。なお、ここにいふ「それ」は「あんま」をさす。あんま 按摩。この場合は自慰行為を意味する。越川正三『新説・太宰治論』（桜楓社、昭46・11）は、「愛といふのは、ひととの接触において彼のなかになんらかの価値を創造し、それが自分に還つてきて自分のなかに生き甲斐を醸成していく人間的交流なのだ、そのような愛のすべを太宰は母から教へられなかつた。そのため、通常なら愛という作業に費消されるべき彼のリビ

ドーは、いままできたように自己のなかに閉ざされて自慰となる。太宰は子供のころ、ある夜便所へ行つたとき書生が真つ暗い部屋で独り活動写真を映しているのを廊下から覗いてみて、『書生のそういう心持』を堪らなく悲しく思う。活動写真で自分をわびしく慰めている書生のすがたに、他人とところを交流させるすべを知らぬ自分自身に共通するものを感じとっているのである。そして、少年自身身の中に閉鎖された豊かなリビドーはこのような自己憐憫を経ながら、自己の容貌や服装への熱心へと向けられていくのだ」と述べる。

母への追憶はわびしいものが多い 饗庭孝男『太宰治論』(講談社、昭51・12)は、「生みの母』『叔母』『たけ』という三者の存在が彼のなかでバラレルであることこそ彼の生の根源的不安と不幸を形成していると言つても過言ではない。生みの母に対して彼は『母に対しても私は親しめなかつた。乳母の乳で育つて叔母の懐で大きくなつた私は、小学校の二三年のときまで母を知らなかつたのである』とのべ、『母への追憶はわびしいものが多い』とし、その一つの例として、彼が子供の頃にむずがつて泣きだした時『どつした訳か、その洋服をはぎ取つて了つて私の尻をびしやびしやとぶつたのである。私は身を切られるやうな恥辱を感じた』(『思ひ出』)と書きつけている。むろん、このような印象が太宰の記憶にもとづいた一方的な体験によるのであつて、そのことがイコール母の邪慳を意味するものではないことは注意しなければならぬとしても、おそらく太宰が母に愛着をもてなかつたのは、彼が他者の手で育てられたため、母への愛が自然な形で育たなかつたところにある、それは潜在的に現在しつづける本能的な母への愛を逆にさまたげるものであり、したがつて彼は母への求愛の変形として愛着のなさを言葉の上で意識的にのべたにすぎないと私には思われる」と論じる。いかにも太宰の語調は「意識的」で、それはただ「母に対してわびしい追憶しか持つことができなかった幼き日」の「宿命的」な「愛の喪失の悲劇」(佐古純一郎『太宰治におけるテカダンスの

倫理』現代文芸社、昭33・5)などといつてすませない、ある方法意識(一一五参照)に裏打ちされている。たとえば「私」が「母」から「尻をびしやびしやとぶ」たれたのは、こつそり「私が蔵から兄の洋服を出し」て着ていたからで、「小学校の二三年」頃の「私」にその理由がわからなかつたはずはない。にもかかわらず、「私」はあくまで「私」の側から「どうした訳か」などといったのがれつつ、「私」の心情がわかつてもらえなかつたのだと「追憶」してゆく。このわかつてもらえないこと、あるいはわからないことに徹底して執着する語りの姿勢こそが、母の「追憶」を「わびしいもの」にし、また周囲(世間)への違和をうむ。と同時に、ただし読者は容易に「私」の心情を理解できるから、つまり「負け犬同志のあいだに、ある種の連帯が成立する」(作田啓一「恥の文化再考」前出)。太宰は徹底して「私」の内側につくことによつて「私」の相対化を拒み、それがよく「私」の内的真実を読者に曝きかけてくる効果をねらつてゐる。

一 21 私 は早くから服装に関心を持つてゐたのである。シャツの袖口にはボタンが附いてゐないと承知できなかった。白いフランネルのシャツを好んだ。襟の襟も白くなければいけなかつた。えりもとからその白襟を一分か二分のぞかせるやうに注意した。(略)私はそのやうなおしやれを、人に感附かれぬやうひそかにやつた。うちの人たちは私の容貌を兄弟中で一番わるいわるい、と言つてゐたし、そのやうな悪いところを、こんなおしやれをすると知られたら皆に笑はれるだらう、と考へたからである。(一一五)

服装に関心を持つてゐた 「笑はれる」ことを気づかう「私」のナルシズムは、もちろん「服装」への「関心」にも向けられる。だが、この「私」の語りは、同時にそれ自体を相対化してゆく視点を獲得している。だから「私」はいつも滑稽な道化の悲哀をあらわにする。「学校の狭い廊下を女のやうになよなよと小走りにはしつ

てみたりする「自身をとらえてみせる」「私」は、もはや単なるナルシストからはみだしているというべきだろう。「おしやれ童子」(「婦人画報」昭14・11)には、「子供のころから、お洒落のやうでありました。小学校、毎年三月の終業式のときには必ず右総代として校長から賞品をいただくのであるが、その賞品を壇上の校長から手渡してもらはうと、壇の下から両手を差し出す。厳肅な瞬間である。その際、この子は何よりも、自分の差し出す両腕の恰好に、おのれの注意力の全部を集めてゐるのです。紺の着物の下に純白のフランクネルのシャツを着てゐるのですが、そのシャツが着物の袖口から、一寸ばかり覗き出て、シャツの白さが眼にしみて、いかにも自身が天使のやうに純潔に思はれ、ひとり、うつとり心酔してしまふのでした。云々」とあり、また「服装に就いて」(「文芸春秋」昭16・2)には、「ほんの一時ひそかに凝つた事がある。服装に凝つたのである。弘前高等学校一年生の時である。縞の着物に角帯をきめて歩いたものである。そして義大夫を習ひに、女師匠のもとへ通つたのである」、「私は高等学校一年生の時に、早くもお洒落の無常を察して、以後は、やぶれかぶれで、あり合せのものを選択せずに身にまとひ、普通の服装のつもりで歩いてゐたのであるが、何かと友人たちの批評の対象になり、それ故、臆して次第にまた、ひそかに服装にこだはるやうに、なつてしまつたやうである」などとある。別所直樹『太宰治の言葉』(新文学書房、昭50・4)は「服装について」と題する一章をもつけ、太宰が「服装に並々ならぬ関心を持つていたこと」を具体的に作品にたしかめるなどしつつ、説いている。フランクネル 紡毛織物のひとつ。平織りまたは綾織りで布面を軽く起毛してあるもの。やわらかく、暖かみと弾力がある。無地のほか、白と鼠色、白と黒など霜降り様のものが多い。フランクネルを模してつくつた綿ネルと区別して、「本ネル」ともいう。襦袢 和服用の肌着。元来は丈の短い半襦袢だったが、のちに絹物などで仕立てた長襦袢ができた。長襦袢はしだいに装飾化して、本

来の肌着としての意義を失つたため、素肌じかに着る肌襦袢ができた。襦袢の語源はポルトガル語 *camisa* といわれる。分曲尺(かねじやく)で約0・3センチメートル。長さの単位としての一分は一厘の一〇倍、一寸の一〇分の一、一尺の一〇〇分の一。なお分は他に、重さや貨幣の単位としても使われる。私の容貌 この「私」は容貌がわるいことを認めてはいない。さきの「真実」をめぐつての場合(一—18)と同様、自分なりの明確な価値基準と判断力をそなえていて、あくまで「自分をいいとこだと信じてゐる」。このゆるぎない信奉こそが、つぎつぎに周囲との違和を生む。くりかえして言うが、ここには後年の太宰の自己劇化があるのであって、このような「奇怪な」子どもは「小説世界の中にしか存在しない」(鳥居邦朗「晩年」の構成「前出」)。太宰が意図しているのはへ違和の描出であつて、在りし日のトータルな自身の像の忠実な再現ではないことに留意すべきだろう。容貌をめぐる屈折した思いは太宰の作品に頻出している。たとえば「大村乾治は頭と鼻のずば抜けて大きい醜悪な顔をした腺病質の子供として東北の文字通り片隅のM町に生れた。(略)彼の幼年時代の生活史は、なんと言つても彼がこのM町一番の素封家の息子であつたといふ事を争ふべからざる基礎となして居た。次に彼の幼年時代、否或はこれは彼の一生をも支配して居るかも知れない忘れてはならぬ皮肉極まるハンデ・キヤツプは彼の顔の醜さである。狭い額、広大な鼻、蒼黒い膚、老人見たいな大きな長頭、これだけの仮設を人々が若し与へられたならば或る滑稽千万な肖像を少しの躊躇もなく書き上げるであらう。實際彼の顔は割合に澄んだ小さい目玉を除くのは他は美といふ語とは此の上なく縁遠いものであつた」(「無間奈落」)。「細胞文芸」昭3・5)。また「私は自身の容貌の可笑しさも知つてゐる。小さい時から、醜い醜いと言はれて育つた。不親切で、気がきかない。それに、下品にがぶがぶ大酒を呑む。女に、好かれる筈は無いのである。私には、それをまた、少し自慢にしてゐるやうなところ

も在るのである」(「俗天使」、「新潮」昭15・1)。「私は子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんたうの子でないと思ひ込んでゐた事があつた。兄弟中で自分ひとりだけが、のけものにされてゐるやうな気がしてゐた。容貌がまづかつたので、一家のものから何かとかまはれ、それで次第にひがんだのかも知れない」(「六月十九日」、「博浪沙」昭15・7)。なお山内祥史「『晩年』」『思ひ出』に到る(「罪」の意識)、『作品論太宰治』双文社出版、昭49・6)は、「醜悪な顔」に原因する疎外の体験は、痛切なエディプス・コンプレックス(父を排して母を思慕する傾向)につらぬかれて、おのが生に色濃く宿命の影をなげかける。私見によればこのエディプス・コンプレックスこそ、太宰治が執拗に固執する自画像的パタアンPatienceの、ひとつの特徴といつてよい」と述べ、また大高勝次郎『太宰治の思い出—弘高・東大時代』(たいまつ社、昭57・3)は、「津島は自分の容貌をひどく醜いように書くけれども、実際は決して醜い人ではなかつた。背丈は高くすらつとしており、顔にも良家の子らしい気品と英才の輝きがあつた」、「津島はまた物事を裏返しにしたり人の心の矛盾や裏面を意地悪く突いて見たり、反語や皮肉アイロニーを弄したりする癖があつた。(略)彼は自分の似顔をことさらに醜く描いて、その下に『色魔醜治です』と書いて廻した。彼の意見によると、こうすると人は反つて彼に同情して、『あなたはそんなに醜い顔では決してない』と言つてくれる、と言うのであつた。反対にまた、同級生の似顔を実物以上に美しく描き、その人に示して、『似ているね』と言うのを聞いて、陰でこっそりわらうやうな意地悪さも發揮する」と回想している。

一—22 祖母も私にとつて苦手であつたのだ。村の芝居小屋の舞台開きに東京の雀三郎一座といふのがかかつたとき、私はその興行中いちにも欠かさず見物に行つた。(略)その興行が済んでから、私は弟や親類の子らを集めて一座を作り自分で芝居をやつて見た。私は前からこんな催物が好きで

、下男や女中たちを集めては、昔話を聞かせたり、幻燈や活動写真を写して見せたりしたものである。そのときには、「山中鹿之助」と「鳩の家」と「かつぼれ」と三つの狂言を並べた。(略)そのうち私はときどき「牛盗人」や「皿屋敷」や「俊徳丸」などの芝居をやつたが、祖母はその都度にながしげにしてゐた。(一七)

繼繼 太子の実母津島イシ。惣助(二代目)の早世した長男惣四郎の長女として安政四年に生まれた。惣四郎の姉きさの後夫惣助(三代目、旧名山中勇之助。嘉瀬村の山中家から慶応三年に養子に入つた)と、きさ病死のあと後妻にきたさよとのあいだには子どもがなかつたので、明治五年九月、惣四郎の忘れがたみイシと、惣助(二代目)とその後妻かねの子惣五郎を夫婦養子のかたちで入籍した。惣五郎一九歳、イシ一六歳。朝日新聞青森支局『津島家の人びと』によれば、「いしは、とりわけ、気性が強かつた。本来なら津島家の家督を継いでいるはずの長男惣四郎の忘れ形見という自負もあつたのかもしれない。終生、強い発言力を持つていた」、「いしおはさは、いつも、広いたたきが見渡される常居(居間)に腰を据え、出入りの人に眼を配つていた。楽しみといへば、自慢の漬物をつくることと、お寺参り。愛用の数珠入れの中に、穴のあいた一文銭を糸でたばねたものをしのばせ、賽銭箱に投げ入れる姿を、金木の人たちはよく見かけたという。日露戦争の直前にできた金木愛国婦人会会長、大谷派婦人法話会支場長など、いかめしい肩書きも持つていた。そんないしを、『金木の淀君』と呼ぶ人もいたそつだ。金木の町並みを見下ろす赤い屋根の大邸宅の眞の支配者は、源右衛門ではなく、昭和二十一年九十歳まで生きたいいしおはさであつたのかもしれない」。また子守のタケは、「家の中を切り盛りしていたのはオバサで、皆からこわがられていました」、「眼鏡越しにジロツとにらまれると、すくんだもんです。オガサもガツチャも余り言わない人でした。家の中のことでオバサが一度駄目だと言ひ出せば、

どんなことをしても駄目でした」(「インタヴュー 越野タケ氏に聞く―子守をした頃の修ちゃん」前出)と回想している。「私」が「祖母を好いてはあな」「(一八) いのは、この祖母が父以上に父的に君臨する存在だったからだ。村の芝居小屋 金木劇場の前身か。回り舞台がある「りっぱな劇場」で、のちに映画館となり戦後まであった(津島康一・東郷克美「対談 太宰治と津島家の人々」、「国文学」昭62・1)という。「長兄をはじめ津島家の人びとには芝居好きの人が多く、町に芝居の一座がやってくるときはいつでも津島家とその勧進元をつとめた」(相馬正一『評伝太宰治 第一部』前出)。

『幻燈 カゲエ、ウツシエ。ガラス版に彩色して描いた画像やフィルムに写した像を映写幕に拡大して映すもの。江戸後期に日本へ渡来し、享和三年(一八〇三)三笑亭(池田)都楽が画像の変化する装置を考案し、写し絵とよばれて評判になった。明治七年には手島精一がアメリカから持ち帰り、幻燈の訳語を与えた。もっぱら教育用として普及したが、玩具用もでき、ひろく流行して幻燈会もしばしば催された。日清戦争頃には国産品も開発されて家庭へも普及するようになった。活動写真 活動写真の名はトマス・エジソンのキネトスコープ(覗き眼鏡式)の訳語で、明治二十九年一月三十一日付「時事新報」の記事に最初に使われたという。また福地桜痴の案出との説もある。スクリーン映写式のシネマトスコープやバイタスコープが輸入されたのが同三〇年。やがて明治末から大正期にかけて、日本活動写真(株)、天然色活動写真(株)、牧野教育映画製作所などの撮影所ができていった。映画という呼称が用いられるのは大正の中頃のことだが、一般には昭和一〇年頃から。津島美知子筆録「アヤの懐旧談」(前出)には、「落成祝の何年あとかはつきりしないが、ある寒い夜父に連れられてへ源に行き台所の炉端に坐つて、文治さんが活動写真を映すのを見せてもらったことを思い出す。カンガルーがピョンピョン跳ねるのが珍しくおもしろかった。おがさ(おかあさん、たね)が炉の熱灰にいけて焼いた、に

どいも(じやがいも)を御馳走してくれた。文治さんは私より五歳年上だからこのとき小学校の上級か、あるいはもう五所川原農学校にいらっていたかもしれない。文治さんは農学校に自転車通学したそうだが、自転車、活動写真の映写機、写真機など村の誰も触ったこともない高価なものを自由にしていた。弟の修治さん礼治さんらをよく撮っていたそうだと回想がある。「白熊の、氷の崖から海へ飛び込む有様」をうつした「映写機のフィルム」(「一八」)があったというから、ひろく普及していた教育映画用のフィルムなどを持っていたものだろう。

『山中鹿之助』 山中鹿之助は戦国時代の武将。「近世時の寛永以降幾版をも重ねた甫庵『太閤記』は、その巻第十九に鹿之助の記事を置く。すなわち『山中鹿助伝』『鹿助度量広く武勇にかさ有事』『鹿介尼子の貴族を求得し事』において、それぞれ生いたち、永祿九年の籠城、そして敗戦後山名禅高を助けての鳥取城奪取、さらに永祿十二年の雲州攻略等を扱い鹿之助の奮闘を描き、剛強知謀の士なることを浮彫りにする。(略)一方鹿之助に対する母の慈愛をも語る。彼女は常々息子の部下に、かたびら・胸服・袴・手拭などを贈つて励まし、息子に向つては、夜戦のときなど決して部下を見殺しにするな、苦楽はともにせよと諭していた。このような母があつたからこそ家臣らは鹿之助に強い信頼を寄せていたのであろう。母は女手ひとつで鹿之助を育ててきたのであつた」(『日本伝奇伝説大事典』角川書店、昭61・10)。講談でも山中鹿之助の武勇談は喧伝され、ひろく親しまれたが、「私」は、「山中鹿之助が谷河の岸の或る茶店で、早川鮎之助といふ家来を得る條を或る少年雑誌から抜き取つて「脚色した」というのだから、たぶん「少年倶楽部」(大正三年一月創刊、大日本雄弁会講談社発行。〈面白くて為めになる〉が編集方針で、講談や落語などの読み物を多く載せた)あたりを見たものか。ちなみに当時の少年一般には立川文庫(明治四四年一〇月創刊。大阪の立川文明堂発行。大正末年にかけて二四〇巻ほど刊行された小型の講談本)第十七編』

武士道精華 山中鹿之助』(『豪傑 山中鹿之助』とも。雪花山人著、明44・11)が読まれていて、そのなかの「鹿之助早川鮎之助と主従の契約を結ぶ」の段を見ておくと、鹿之助が京都を発つて播州街道を歩いていると幅二間ばかりの河があり、河の水を逆流させて鮎を獲っている男がいた。その怪力に感心して、「拙者は山中鹿之助幸盛といふ者であるが、苦しからずば御身の素性をうけたまはりたい」とその素性を尋ねると、「件の男は、しばらく鹿之助の顔をながめて居りましたが、若年ながら凡人ならずと見てとり、七イヤ、お尋ねにあづかつて申しあげるも嗚呼がましうございませうが、元私の先祖といふは、山蔭中納言に仕へたる吉田八郎と申すもの、今はかく農民に零落れてをります者の、世は戦国のことであるから、どうかして名前をあげたいと、思つてはゐれど太刀が一振あるではなし鎧が一領あるではなく、貧乏暇なしで、お恥しいことでございます」と答える。そこで鹿之助は家来に取り立ててやる旨を約束し、その場で金子十兩を与えて、「御身の名前は七助では面白くない、この早川を物の数ともせず、鮎を漁る大力を一つの名前として、今日より早川鮎之助幸高と名乗るべし」といえば、七助はよろこんで再会を約す(『立川文庫傑作選』人物往来社、昭42・8再録の本文によつたが、ルビは省略した)。「私」が読んだ「或る少年雑誌」の物語では、「谷河の岸の或る茶店で」出会つたことになっている。さまざまなバリエーションがあつたものだろう。「父母が私を愛して呉れないといふ不平を」「一二」抱いている「私」が、この「山中鹿之助」をいわゆる母と子の愛の絆の物語として求めたかと憶測できなくはないが、うがちすぎか。

『鳩の家』 佐藤紅緑の小説。「読売新聞」紙上に大正三年十一月二十六日から翌四年五月三〇日まで連載され、のち『鳩の家』上・下篇(菊屋出版部、大4・5・6)として出版された。「鳩の家」は紅緑が顧問をつとめる劇団新日本劇で上演されたこともあつたという。紅緑の活躍は幅ひろく、とくに大衆作家、「あゝ玉杯に花うけて」などの少年小説の大家として

人気を集めた。青森県弘前市出身、本名治六。昭和二四年六月三日没。なお太宰は「傀儡」(『憂気楼』大15・6)のなかでも、「オシが小学校の三年生の時に紅緑の『鳩の家』だかを読んで大声で泣き出したことをオシは今でも覚えて居る」と記していて、よほど印象に残つたと見える。

『かつぼれ』 大道演芸。かつぼれかつぼれという俗謡にあわせて踊る滑稽おどりのこと。幕末に願人(がん にん)坊主が演じたのにはじまる。明治になつてから、数番の手踊りを加え三味線も入れた一座が浅草見附の原を常舞台とするにいたつて、かつぼれ踊りと称した。明治十年頃から寄席に出たり、花街でも余興に楽しまれて、ひろく普及した。「かつぼれ かつぼれ 甘茶でかつぼれ 塩茶でかつぼれ ヨーイトナ ヨイヨイ 沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀伊国蜜柑船 豊年じゃ 満作じゃ 明日は旦那の稻刈で 小束にからげて ちよいと投げた」という歌詞が代表的。歌舞伎舞踊の「かつぼれ」もあるが、「私」のいう「かつぼれ」は「雀三郎一座がおしまひの幕の時、いつも楽屋総出でそれを踊つたもの」というのだから、景気よく踊りまわる「かつぼれ踊り」のことか。縮刷版『大辞典』(平凡社、昭28・6)には、「俗謡に合せて踊る滑稽な踊。住吉踊から変じたもので昔は中央に長柄の二蓋傘を立て、白木綿の衣に丸ぐけの帯、墨染の腰衣をつけた大勢が、これを取り巻いて踊り、その間に掛合嘶めいた事を行った。後には僧形を廃して染浴衣に平ぐけ帯といふ著附になつたが頭は坊主で、明治になつては梅坊主がその家元格になつてゐた」とあり、その梅坊主のかつぼれについての談話を森銃三『明治東京逸聞史2』(平凡社東洋文庫、昭44・7)は、みじかく紹介している。それによると「東京の名物」の梅坊主は「大正の震災前後」に引退したらしい。

『牛盗人』 和泉流能狂言の曲名。御所の牛を盗んだものがいて、牛奉行が訴人には望みの褒美をとらせると書いた高札を立てると、兵庫三郎が犯人だとひとりの少年が訴え出た。ただちに捕らえられた三郎は、訴人がわが子と知るや観念し、不孝の子を

もつたと嘆きつつ、じつは親の追善供養をする金のため牛を盗んだと語る。が、牛奉行は許さず、獄舎へ引つ立てようとする。と、そのとき少年が、「望みどおりの褒美をくださる約束ですから、どうか父の命を助けてください」と、孝行ゆえに親を訴え出たことを明かす。三郎は子の孝心に感じて泣き、奉行もまたころ打たれて許してやる。さきの「山中鹿之助」と同様、親子の心のかよいあいを扱ったものであることを、やはり見過ごしたくない。祖母が「その都度にながしげにしてゐた」のは、「引幕の針金に」「頸をひつかけて了つた」からでも、「河原乞食」を蔑視していたからでもなく、この子どもの「私」がつまりあてがましい芝居を「下男や女中たちを十人ほど集めて」やっていることが、いわば癩にさわつたからではないのか。

■皿屋敷■ 江戸番町に屋敷をもつ青山主膳の侍女お菊は主膳秘蔵の十枚揃いの皿の一枚をあやまつて割つてしまい、怨恨を残して井戸に身を投げた。やがて生まれた主膳の子の指は一本足りず、井戸からは毎夜皿を数える哀しげな声が聞こえてきた。「番町皿屋敷」、『孝経楼漫筆』巻之三(一)。同種の皿屋敷伝説やお菊伝説は全国各地に伝えられている。「番町皿屋敷」を翻案した操り浄瑠璃「播州皿屋敷」の初演は寛保元年のこと。この「播州皿屋敷」を岡本綺堂は大正五年一月に一幕二場の劇「番町皿屋敷」に仕立て、翌月本郷座にて初演。「配役は青山播磨(二世左団次)、放駒四郎兵衛(六世寿美蔵)、柴田十太夫(市川左升)、お菊(三世松蔭)ほか。血氣の旗本青山播磨は白柄組の水野十郎左衛門の配下として町奴とつねに事を構えている。伯母は播磨の乱暴をしずめるため妻帯をすすめる。しかし播磨には未来を誓った恋人腰元のお菊があつた。お菊は播磨が近く奥方を迎えるという噂をきいて青山家の重宝の皿を割つて播磨の心をためそうとする。播磨は家の宝も恋人の命にかえられぬと許すが、用人の十太夫から故意に割つたものときき、自分の心を疑われたことを怒りお菊に残りの九枚を割らせたいうえに斬る。そして心の痛手をまぎらすため、ふたたび町奴との

争いに飛込んでゆく。怪談狂言で著名な皿屋敷に材をとりながら、怪談部分を捨てて、恋一筋の純情な播磨の無念を力強く描いた作でこの点に万人の共感を呼ぶ新鮮さがある」(『日本近代文学大事典机上版』講談社、昭59・10)。たとえば「新古の名劇として著名な歌舞伎劇、新派劇、新劇、喜劇等から、さらに代表的な名台詞七十章を選択して抄録」した『台詞全集附合方へ日本音曲全集15』(日本音曲全集刊行会、昭3・6)にも、もちろんこの綺堂、左団次による「番町皿屋敷」は採られている。「播磨」エ、おのれ、それ程までにして我心を試めさうとは、あまりといえは憎い奴、こりやよく聞け。天下の旗本青山播磨が、恋には主家来の隔てなく、召仕のそちと云ひかはして、日本中の花と見るは我が宿の菊一輪と、(略)かたい義理を守つてゐるのが、嘘や偽りであることか、つもつてみても知る、筈。なにが不足でこの播磨を疑つたぞ。／＼お菊を小突きまはす。お菊倒れながら泣く。／＼お菊『その疑ひももう晴れました。お免しなされてくださりませ。／＼播磨』い、や、そちの疑ひは晴れようと、うたがはれた播磨の無念は晴れぬ。云々」(『青山家座敷の場』、原文は総ルビ。同書の「解説」には「昭和三年三月明治座の舞台開にも特に上演した名劇である」などがある)。この播磨とお菊の物語は、あえて言えば、誠実な心が相手に通じない無念を「私」がひそかに共有したのでろうし、あとひとつ、「召仕」との恋という点では、このあとの「小間使」みよと「私」との恋につながる要素がひそんでいるともいえる。いわゆる明治以降の新作の皿屋敷ものとしては、この他に河竹黙阿弥作「新皿屋敷月雨暈(しんさらやしきつきのおまがさ)」(明治一六年五月、市村座初演)も有名だが、「私」が演じたのは「恋一筋の純情な播磨の無念を力強く描いた」綺堂のものか。

■俊徳丸■ 「弱法師伝説の主人公。謡曲『弱法師』や説経『しんとく丸』で有名。説経では題名にあるように、その名をしんとく丸とよぶ。(略)俊徳丸は河内の国高安の左衛門尉通俊の一人ながら、人の讒で棄てられ、盲目

の乞丐人となつて弱法師とよばれている。しかし、天王寺の施行の場で親子の対面を果たし、故郷へ戻るといふのが謡曲の筋。天王寺縁起を取り入れ、救世観音信仰や浄土信仰を背景に、盲目の美少年のすみきつた悟りの境地を描いた作。これに対して説経では、(1)信吉^{しんきち}長者の清水観音への申し子譚、(2)その申し子しんとく丸と蔭山長者の乙姫との恋愛譚、(3)継母の呪咀と讒言譚等が盛り込まれ、全体としては、説教者たちの漂泊生活をも反映してか、乞丐人しんとく丸のイメージが強調されている」(『日本伝奇伝説大事典』前出)。

いうまでもなく、ここにもまた親と子の関係が扱われていて、見過ごせない。「かつぼれ」は別として、「山中鹿之助」以下の「狂言」「芝居」を並べて置くことで、語り手は求めて得られぬ親子の情愛に過敏な「私」の自画像を描いているふしがある。

一 23 私^{わたし}は苦勞性であつて、いろんなことをほじくり返して氣にするものだから、尚のこと眠れなかつたのであらう。父の鼻眼鏡をこつそりいぢくつて、ぼさつとその硝子を割つてしまつたときには、幾夜もつづけて寝苦しい思ひをした。

一 軒置いて隣の小間物屋では書物類もわづか売つてゐて、ある日私は、そこで婦人雑誌の口絵などを見てゐたがそのうちの一枚で黄色い人魚の水彩画が欲しくてならず、盗まうと考へて静かに雑誌から切り離してゐたら、その若主人に、治^ちこ、治^ちこ、と見とがめられ、その雑誌を音高く店の畳に投げつけて家まで飛んではしつて来たことがあつたけれど、さういふやりそこなひもまた私をひどく眠らせなかつた。(一八)

苦勞性 「小学二三年」あまりの子どもが「不眠症」とか、「苦勞性」といふのも滑稽にきこえるが、この「私」は「もう子供でな」「九」いのである。そしてまた、その「苦勞」をひきおこす自意識の構造からいへば、そこには秘密性と演技性が絡んでいる。「私」の行為は「こつそり」、あるいは「静かに」たくらまれ、そして「

やりそこな」う。結果として「見とがめられ」ることになるから、不安は昂じる。 軒置いて隣の小間物屋 (源の二軒となり)

金木村大字金木二四五番戸)の雜貨店(原(やまはら))。当主津島忠次郎の長男市太郎のもとへ太宰の次姉トシが大正二年八月二日嫁いでいる。その長男逸朗は太宰らの遊び仲間で、高等小学校時の作文「雪合戦」に登場し、またのち太宰が青森中学時代にいた豊田家に太宰の弟礼治と一緒に下宿し、弘前高校にすすんだ太宰にさわられて昭和二年五月二日に青森市公会堂でおこなわれた改造社主催の現代日本文学全集文芸講演会へ秋田雨雀・片岡鉄兵・芥川龍之介らのほなしを聴きに行つたりしている。逸朗は「昭和十二年に東京で服毒自殺し」たが、「どうも太宰の影響を受けて薬を飲んだんじゃないか」といわれている(津島康一・東郷克美「対談 太宰治と津島家の人々」前出)という。タケが、「何時も新しい本が入れば通帳をもつて本屋に買ひに行くのです」(「私の背中で」前出、一八参照)と語っている「本屋」がこの「原」。浴 「私」の名が「治」であることが明かされる。いうまでもなく太宰治の治だが、本名の修治でないことに留意しておく必要がある。「私」は太宰治の自画像であつて、津島修治のそれではない。たとえばここで、津島修治に即していえば「婦人雑誌の口絵」をこつそり「切り離してゐる修治を」見とがめ「たのは親戚のへ原の若主人市太郎で、その背後には両家のある特別な親しいつながりがあったわけだが、「私」の場合はそれが消されている。なお、「この『黄色い人魚』の『黄色』は、色彩のもつ性格的傾向をあてはめると、いつまでも幼児のような甘えられる状態でいたい気持ちが強くと、大事にして呉れる人の注意をひきたがる性格をもっている」と佐々木啓一「太宰治試論—イカリスの性格形成の深層性をめぐって」(「論究日本文学」16、昭36・12、『日本文学研究資料叢書』太宰治「有精堂、昭45・3再録)は述べる。色彩のイメージ(共通感覚)論にはつねにある覚束なさが試いきれないが、いま塚田政『色彩の美学』

(紀伊国屋書店、昭41・7)を参考までに見ておけば、「黄色は太陽の光の色である。そのためインドでは壮麗、光輝のシンボルとされている。中国では黄色は皇帝の色とされ、一般の人が使うことを許されなかった。(略)古代ローマでも帝王の色として尊重されていた。マレーシア連邦では黄色はサルタン家の王室色である。またビルマでは濃いサフラン黄色は仏教の僧侶が着るローブの色として特別の意味をもっている。／＼しかしキリスト教では黄色は裏切り者ユダの着物の色であったことから、キリスト教の普及以来欧米では最下等の色とされ、悪党を『イエロー・ドッグ』というのをはじめ、臆病者や俗悪なジャーナリズムを黄色いという語を用いてけいべつする。またブラジルでは黄色は絶望を表わす色であり、回教においては黄色は死を象徴する色とされている。／＼わが国では黄色は赤い坊の産衣の色として用いられ、また病人の掛蒲団に黄木綿を使うといった風習が昔からあるが、これは黄色が光の色で、保温の効果があると信じられていたためであろう。また黄色は未熟の意味をもち、『くちばしが黄色い』などと、年が若く経験の浅い人をのしる言葉に使われる。最近では黄色は安全色といわれ、交通安全の目的で児童の帽子や靴その他に盛んに利用されているが、これは色の視認性が高いためである」。すなわち黄色の多様なイメージのあるなか、「わが国」における黄色は「未熟の意味をもち」、また「視認性が高い」という。これからすれば佐々木のいうところも頷けるが、ただし「私」が「欲しくてなら」なかつたのは「人魚の水彩画」なので、そこには遙かなる国へのあこがれがある。「思ひ出」ではこのほか、「海峡を渡つて来る連絡船が、大きい宿屋みたいにたくさん部屋部屋へ黄色いあかりをともし、ゆらゆらと水平線から浮んで出た」「六一」ともあつて、すくなくとも「私」にとつて「黄色」はある種の慰安やあこがれを喚起する親しいイメージをそなえていたとはいえるだろう。

一―24 或る秋の夜更に、私は彼等のぼそぼそと語り合ふ話に耳傾けてみると、遠くから虫おくり祭の太鼓の音がとんとんと響いて来たが、それを聞いて、ああ、まだ起きてゐる人がたくさんあるのだ、とずるぶん気強く思ったことだ。おぼろげに耳に響く。

虫おくり祭 農作物の害虫を除くため、村人が夕方あつまつて松明をともし、鐘や太鼓を鳴らして囃しながら、田の畦を歩きまわるなどして村はずれまで虫を送りだす農村行事。斎藤実盛が討たれて稲虫になつたとの言いつたえをふまえて実盛おくりとも。森山泰太郎『日本の民俗2 青森』(第一法規出版、昭47・8)によれば、「村中の田植が終わると、津軽では七日ほどサナブリヤスミとなる。若者たちはサナブリダイコ(太鼓)を、オボスナサマの境内や田のあぜ道で連日打ち鳴らす。これは稲作のための暑気を解ぶためといわれた。／＼サナブリヤスミの中心行事は虫送りである。五所川原市・木造町など、いわゆる新田地帯では、若者たちが各戸から集めた藁で、六尺(約一・八メートル)余りの人形二体と、長さ一〇尺余(約三メートル)の蛇体のものに木彫りの龍面をつけた『虫』を作る。虫送りの行列は、先頭に太刀振り、次に荒馬といつて、それぞれ所作をする若者のあとに、この藁人形が担がれ、太鼓ではやしなから村中を巡回する。そのあと村境には人形を立て、蛇体の『虫』は路傍の松の枝などに掛けて終わる。村回りのとき、列中の者が水でとかした米の粉を、見物人の顔に塗りつけたりする。稲の花がよく咲くようにとの呪いである」という。津島美知子筆録「アヤの懐旧談」(前出)には、金木でもまた「子供まで総動員、大忙しの田植えが終わると町中一斉に仕事を休んで、休みの最後の日が虫送り。これは稲の害虫の退散を祈つてやる町の最大の行事で、へ源ではこの祭に豊年満作ののぼりと警固役を出した。池屋(高橋家)と角金(角田家)からも警固役を出した。私は惣助さん時代からのものという陣笠をかぶり股引、腹掛の上に陣羽織を着て鉄棒をひき行

列のあとさきを見守る気持で歩いた。行列は太刀振り、獅子舞い、荒馬とつづき、笛太鼓手振り鉦の鳴物入りで、それぞれはねたり踊ったり賑やかに一日かけて町中を練り歩く。へ源のような大家では、とくべつにタタキに順に入つて踊つて見せ、家中のものみんな式台に立ち並んで見物した。村境にくると御幣を立てお神酒をあげて獅子舞いする。／虫送りの太鼓は大小二つあつて、大太鼓は直径九十センチくらい。虫送りの日がきまるとその数日前から若い衆は宿に集まつて、白布を巻いたヒバのバチで打ち鳴らす。虫害に劣らず冷害が恐ろしいから『太鼓叩くとヌグミヲ出る』（暑気が出る）といつて盛んに叩いた。ドーンコドドンコ、ドロスコドドンコ、ドーンコドドンコ、ドロスコドドンコ、繰り返し繰り返し打ち鳴らす太鼓の音は二キロさきまで聞こえた」との回想がある。「田植えが終わると」というが、ここでは「或る秋の夜更」のこととして語られている。ちなみに虚子編『新歳時記 増訂版』（三省堂、昭26・10）によれば、「虫送」は秋の季語。松明につき来る蛾や虫送（ながし）、産土神の森をこがして虫送（言子）。

一―25 音に就いて思ひ出す。私の長兄は、そのころ東京の大学にゐたが、暑中休暇になつて帰郷する度毎に、音楽や文学などのあたらしい趣味を田舎へひろめた。長兄は劇を勉強してゐた。或る郷土の雑誌に発表した「奪ひ合ひ」といふ一幕物は、村の若い人たちの間で評判だつた。（二〇）

音に就いて思ひ出す 前段の「虫おくり祭の太鼓の音」からの連想で、以下の「兄のレコオド」をめぐる回想へとうつる。へ音くを通路に話題をつないだところに手法としての新しさがある。長兄源右衛門・タ子の三男文治。明治三十一年一月二十七日生まれ。長男総一郎、次男勤三郎がともに夭折したため、事実上の長男になる。明治高等小学校から五所川原農学校へ進み、「そのころ」は早稻田大学の政治経済学科に在籍。谷崎潤一郎に傾倒し、また折から流行の演劇熱に関心をよせていた。早大在学中の大正一一年五月、岡崎れ

いと結婚。同一四年一〇月、二七歳で金木町長となる。昭和二年九月、青森県議会議員。同六年六月、政友会青森県支部長に推薦されたが辞退し、九月の県議選にも不出馬。弟太宰の鎌倉心中事件やそれにつぐ非法法運動に対する検挙などを案じてのことだといふ。同一〇年、県議再選。同一二年四月、衆議院議員選挙に当選したが、翌月選挙違反で摘発され当選辞退、あわせて県議も辞職した。同一二年四月、戦後はじめての衆議院選挙に当選。翌二年四月、青森県知事当選。知事在職は三期九年。ただし一期目は林檎税創設問題で、二期目は県議員の給与問題でそれぞれ中途辞職。同三年、衆議院選挙に当選。三五年以後は池田勇人の派閥に属して外務政務次官、農林政務次官を歴任したが、三八年の選挙では落選。のち参議院議員として返り咲くなどしたが、昭和四八年五月六日逝去。享年七五歳。父源右衛門亡きあと、若くから津島家の家長としてふるまい、よくその責を果たした。或る郷土の雑誌に発表した「奪ひ合

ひ」 未詳。太宰の「兄たち」（「婦人画報」昭15・1）には、「長兄は、二十五歳で町長さんになり、少し政治の實際を練習して、それから三十一歳で、県会議員になりました。全国で一ぱん若年の県会議員だつたさうで、新聞にはA県の近衛公とされて、漫画なども出てたいへん人気がありました。／長兄は、それでも、いつも暗い気持のやうでした。長兄の望みは、そんなところに無かつたのです。長兄の書棚には、ワイルド全集、イブセン全集、それから日本の戯曲家の著書が、いつばい、つまつて在りました。長兄自身も、戯曲を書いて、ときどき弟妹たちを一室に呼び集め、読んで聞かせてくれることがあつて、そんな時の長兄の顔は、しんから嬉しさうに見えました。私は幼く、よくわかりませんでしたけれど、長兄の戯曲は、たいいてい、宿命の悲しさをテエマにしてゐるやうな気がいたしました。なかでも、『奪ひ合ひ』といふ長編戯曲に就いては私は、いまでも、その中の人物の表情までも、はつきり思ひ出すことができるのであります。云々」とある。ちなみに山内祥史「年譜」

(『太宰治研究Ⅱ』所載、前出)の大正一五年九月の同人誌「青んぼ」創刊の項に、「同誌には、かつて『陸奥の友』に小説を発表したこともある長兄文治が、随筆『めし』を寄稿した」とある。「或る郷土の雑誌」もまた、この「陸奥の友」か。なお、「あざみ草」の薊は一般に、「日本ではアサミの花も一盛り」とのことわざがあり、地味でも盛りにはそれ相応に美しくなることのとえに使われる。西洋では聖母マリアが十字架から引き抜いた釘を埋めた場所から生じたというので、キリスト教の聖花とされる。北欧ではとげが魔女を追い払い、家畜の病気除けや結婚成就のまじないにも効くと信じられた」(平凡社版『大百科事典』前出)。花言葉はへ厳しき。

一―28 私の父は、うちで何かの響応があると必ず、遠い大きなまぢかららるるばる芸者を呼んで、私も五つ六つの頃から、そんな芸者たちに抱かれたりした記憶があつて、「むかしむかしそのむかし」だの「あれは紀のくにみかんぶね」だのの唄や踊りを覚えてゐるのである。さういふことから、私は兄のレコオドの洋楽よりも邦楽の方に早くなじんだ。ある夜、私が寝てゐると、兄の部屋からいい音が漏れて来たので、枕から頭をもたげて耳をすました。あくる日、私は朝早く起き兄の部屋へいつて手当り次第あれこれとレコオドを掛けて見た。そしてたうとう私は見つけた。前夜、私を眼らせぬほど興奮させたそのレコオドは、蘭蝶だった。

〔二〇〕

遠い大きなまぢ 朝日新聞青森支局『津島家の人びと』によれば、源右衛門は「具議時代には青森浜町の塩谷旅館を、代議士になつてからは東京神田の龍名館を定宿にして料亭通い」、「芸者遊びが好きだったという」。「遠い大きなまぢ」としては弘前も考えられるが、やはり具議時代をすごした青森の芸者たちがよばれたものであろうか。ちなみに、相馬正一によれば、のち大正十四年に町長にな

つた長兄文治もまた、「青森市に向向の時は塩屋旅館を定宿にしていた。(当時貸し切りの一室があつたという。)(筑摩全集類聚版『太宰治全集』12、「日記(大正十五年)」付載の(註)」。

「むかしむかしそのむかし」 未詳。芸者が座敷で興じるときの唄のひとつか。あれは紀のくにみかんぶね 「かつほれ」の代表的な歌詞の一節。一―22参照。なお茨城県の磯節にも同じ文句が見える。

レコオド

蓄音機が日本に最初に輸入されたのは明治二二年のこと。同二五年、長谷川武次郎商店が、初の国産化に成功した。

当初は見世物に供され、浅草花屋敷の名物にもなった。当時は欧米各社が日本の古典音楽や軍楽隊の演奏を録音発売していたが、明治四〇年、日米蓄音機株式会社(のちのレコオド)の創立によって、国産レコオドが誕生した。同四三年、株式会社日本蓄音機商会設立。同社のレコオドは大正四年以降は「ニッポノホン鷲印レコオド」の商標で、大正期を代表するレーベルとなった。分野は多岐にわたり、演説・経文法話・唱歌・童謡・お伽歌劇・歌劇(歌謡曲)・劇歌・琵琶・詩吟・謡曲・長唄・清元・常盤津・新内・一中節・端唄小唄・俚謡・芝居・声色・活動写真・書生節・落語・浪花節・講談・義太夫・萬歳など、数多い。有名な松井須磨子の「復活唱歌」(カチューシャの唄、相馬御風作詞・中山晋平作曲、大正四年)は、大正三年創立の東洋蓄音機合資会社(オリエントレコオド)の録音発売によるもの。やがて昭和になると日本コロムビア、日本ポリドール、日本ビクターなど外資系のレコオド会社の創立があいつぎ、これによって従来輸入に頼っていた洋楽レコオドがようやく国内プレスされるようになった。

兄の部屋 「いつてみれば、この長兄のへやは、太宰治の文学を芽ばえさせた温床であつた。彼は、兄の怒りをおそれ、兄の留守を選んで、忍び入り、こそことと、それらの文学書を盗み読んだつもりでいたようであるが、そして一生そう信じていたようであるが、文治氏には、いっさいが見通しだったようである。／『なんといつても、やはり、子供ですすね。私が見ると、一目で、わかる

んですよ。本の位置がかわっていたり、外箱が裏返しになっていたりするんです。けれども私は、修治に、それを指摘して、責めるようなことはしませんでした。修治は、私に見つかるとかわかったのかもしれないが、私が私には、それがかなしかつたんです。読みたい本があったら、どうして率直に、読ませてくれと、いつてくれないのかなアと、いつも、それをみると、憂鬱だつたんです」と、後年、文治氏はいつていた（今官一『少年太宰治』前出）。

蘭蝶 「明治氏はいつていた」（今官一『少年太宰治』前出）。

鳥（あげがらす） 「伊太八」とならぶ新内の名曲。「此糸蘭蝶」とも。本題名「若木仇名草（わかぎのあだなぐさ）」。「初世鶴賀若狭椽の作曲。安永末頃の作か。太鼓持の市川屋蘭蝶が榎屋の遊女此糸（このいと）と馴染み、妻お官が身を売った金までいれあげる。お官は客となつて此糸に会い、蘭蝶と別れてくれるようたのむ。此糸はお官の誠心につたれて縁を切ることを約束する。それを隣の部屋で聞いていた蘭蝶は、此糸は死ぬ覚悟であろうと察し、お官の願いもむなし、此糸と心中を企てる。いま、『ニツポノホン音譜文句全集へ完』（ニツポノホン音譜文句全集発行所、大11・8改訂増補六版。初版は大6・7。発売元は日本蓄音機商会）で見ると、「蘭蝶」は富士松加賀大夫・吾妻路宮古大夫によるもので、レコード番号は日蓄一五一二一〜一五一四。「上」云わねばいとゞ気にかゝる胸の涙のやるかたなき、蘭蝶殿と夫婦の成立、咄せば長い高輪でひとつ内に互にてあしゆゑんでこそあれ、末かけて約束かため身を堅め世帯かためて落ち付て嬉しやと思ふたはほんに一日あればこそ。「中」其りや誰故じやこな様故大切な男を唆し夜昼となく引付られ商売事は浮の空願肩で呼で下さんす馴染のお客茶や衆も来る度毎に又留守かと愛想盡され後ちくは。「下」呼んで呉ても内証の詰りくで私が身を売って渡した其金を皆こな様に入上て嬉しからぶか、よからうか腹が立やら、悔しいやら、喰い付たいほど思ふたわ今日迄日には幾度か其恨を打捨て互の為の心てい咄し、コレ爰をよ心聞しやんせや、私じや辻根からの素人ではない芸者勤は女郎衆も

同前憂も辛いもよう知つて居るわいな、夫に今では勤の身態も意気地も身に詰まされての談合づく何ぞアノ蘭蝶殿と縁切て再び呼んで下さんすな」とは云もの、二人ながら此様に、盛に成て居る最中耳にも入まい聞分あるまい」（ルビ省略）。

一―27 私はけれども長兄より次兄に多く親しんだ。次兄は東京の商業学校を優等で出て、そのまま帰郷し、うちの銀行に勤めてゐたのである。次兄も亦うちの人たちに冷く取扱はれてゐた。（二一）

次兄 四男津島英治。明治三四年生まれ。東京の専修商業学校を卒業し、郷里に帰つて金木銀行に勤めた。大正一三年八月一日、青森市大字寺町五八番地小島莊三郎の次女タカと結婚。翌一四年六月一九日、長男一雄が誕生。昭和三年には金木町長に当選したが、政争がらみの不正開票裁判にまきこまれるなどした。「英治はヤマゲンで、終始、蔭の人であつた。兄文治は若いうちから政治家。弟修治は、その死後、とみに文名があがつた。彼らに比べると、英治は部屋住みが長く、戦前は第五十九銀行金木支店長などをしたもの、それはやはりヤマゲンの力によつてであつた。だが、兄や弟たちと比べて親しみやすい人だつた。酒が強く、正座したまま益を重ねる。客が多かつたヤマゲンでは、文治にかわつて、夜更けまで付き合う義理堅さをみせた。『はっはっはっ』と、豪快な復讐笑いをする人でもあつた」（朝日新聞青森支局『津島家の人びと』）。

「この兄は、谷崎潤一郎の初期からの愛読者でありました。それから、また、吉井勇の人柄を、とても好いてゐました。次兄は、酒にも強く、親分氣質の豪快な心を持つてゐて、けれども決して酒に負けず、いつでも長兄の相談相手になつて、まじめに物事を処理し、謙遜な人でありました。さうしてひそかに、吉井勇の『紅燈籠』に行きてふたたび帰らざる人をまことのわれと思ふや。』といふふうな辭勃の雄心を愛して居られたのではないかと思はれます。（略）顔も、左団次みたいな、立派な顔をしてゐました。長兄の顔は、線が

細く、松蔦のやうだと、これも家中の評判でありました」(「兄たち」)。「英治氏も太宰によく似ていた。骨組みの大きな、がっしりした体格であるにもかかわらず、どこか華奢で、繊細で、優雅な感じがするのは、色白な皮膚のきめが細かくて、血の色が透けてみえるからであろうか。それとも、柔和な、やさしさをたたえた、よく動く目が、内部の感情のこまかな動きを、小波のように反映するからであろうか」(杉森久英『苦悩の旗手 太宰治』文芸春秋、昭和42・6)。

『おちの銀行 金木銀行』。曾祖父惣助は、灯油、反物の販売や豆腐の製造販売などの他、『津島商行』と称する金貸業を営んでいて、土地の人々は、津島家を『津惣』と呼んでいた、「明治三十年七月十七日、津島家は合資会社金木銀行を設立。総出資額一万円、出資者十二名、うち津島惣助二千元、津島源右衛門千八百円、津島友三郎五百円の出資をし、源右衛門が頭取となった」(山内祥史『年譜』、『太宰治研究Ⅱ』)。大正八年、株式会社となり、昭和十三年八月、第五十九銀行に買収された。

『私』は自分と同じく「次兄の不人気もその容貌がもてあろうと思つてゐた」というのだが、語り手としての「私」まで、それが理由のすべてと考へてゐるわけでもなからう。理由にもならない理由をあえて持つてくることで、読者をこちら側にひきこみつつ、不合理で不可解な周囲との違和をきわだたせる。また、「私」が他人(この場合は次兄)と「親し」むのは、いわゆる世間的なへ負の共有が成立したときにかぎる。したがって、「姉たちには可愛がられ」「(二三)でも、けつして父や長兄に親しみ(連帯)を感じたり、感じられたりすることはない。母ではなく叔母、長兄ではなく次兄、そして「金木の淀君」の祖母ではなく野暮でおとなしい曾祖母に育てられ、「曾祖母の娘だとばかり私は思つてゐたほど」(二五)の「上の姉」と、数えあげれば一貫している。

一 一 末の兄と私とはお互いに反目してゐた。私は色々な秘密を此の兄に握られてゐたので、いつもけむつたかつた。

それに、末の兄と私の弟とは、顔のつくりが似て皆から美しいとほめられてゐたし、私は此のふたりに上下から圧迫されるやうな気がしてたまらなかつたのである。(二三)

『末の兄』 五男津島圭治。明治三六年六月生まれ。上野の東京美術学校彫塑科にすすみ、朝倉文夫のもとで彫刻を学んでいたが、昭和五年五月下旬、結核性膀胱カタルで神田の阿久津病院に入院、翌月二一日死去。享年二十八歳。文学や絵にも興味を示し、文芸同人誌「十字街」(大15・1)10全10冊、教佑社書店刊)に参加して夢川利一のペン・ネームを用いたこともある。同じく「文芸時代」系の「辻馬車」同人たちとも親交があつたらしく、「大正十五年六月、川端康成の処女作品集『感情裝飾』(金星堂刊)が出版されたとき、五十余名の知友が集まつて出版記念会を開いたが、菊池寛や横光利一ら『文芸春秋』『文芸時代』の関係者たちと共に当時二十四歳の三兄圭治も出席した。(川端家の蔵書『感情裝飾』初版本の見返しに参会者全員のサインが残されているが、その中に津島圭治の名も見える。)(「相馬正一『評伝太宰治 第一部』)という。一五歳の太宰が「幽閉」の作者井伏鱒二を発見したのも、圭治が持ち帰った雑誌のなかの一冊「世紀」大正一二年八月号においてであつた。また、大正一五年九月、夏休みで帰郷していた圭治のさそいに太宰や礼治らがのり、同人二〇名の文芸同人誌「青んぼ」を創刊。同誌は翌月第二号を出して自然廃刊した。太宰の「兄たち」(前出)のなかでは、この三兄圭治のことがもつとも多く語られてゐる。「この兄は、からだが弱くて、十年まへ、二十八歳で死にました。顔が、不思議なくらゐ美しく、(略)私は時々ぼんやり、その兄の顔を眺めてゐて、ねたましきでは無く、へんにくすぐつたいやうな楽しさを感じてゐました。／性質はまじめな、たいへん嚴格で律儀なものをさへ、どこかに隠し持つてゐましたが、それでも趣味として、むかしフランスに流行したとかいふ粹紳士風、または鬼面毒笑風を信

奉してゐる様子らしく、むやみやたらに人を軽蔑し、孤高を装つて居りました。「この兄は、なくなる二三年まへから、もう寝たり起きたりでありました。結核菌が、からだのあちこちを虫食ひはじめてゐたのでした。それでも、ずいぶん元気で、田舎にもあまり帰りましたが、入院もせず、戸山が原のちかくに一軒、家を借りて、同郷のWさん夫婦にその家の一間にはひつてもらつて、あとの部屋は全部、自分で使つて、のんきに暮してゐました。私は、高等学校へはひつてからは、休暇になつても田舎へ帰らず、たいてい東京の戸塚の、兄の家へ遊びに行つて、さうして兄と一緒に東京のまちを歩きまはりました」などとある。杉森久英『苦惱の旗手 太宰治』(前出)は、「五男の圭治という男も、早死しましたけれど、彫刻がすきで、東京の美術学校へ入つていましたし……この男を、なくなつた父は医者にするつもりだつたそうです。圭治という名前も、そういう意味でつけたとか聞きましたが……医者のことを刀圭家などと言いますね。そういうところからつけた名前だそうですが……しかし彼は医者になりませんでした」との長兄文治の回想をつたえている。『秘の葉 七男礼治。明治四五年七月二日生まれ。大正一四年青森中学にすすみ、豊田家に止宿、太宰が弘前高校に進学するまで同居した。生来虚弱で内向的な性格であつたという。中学在学中の昭和四年一月五日、敗血症のため死去。享年一八歳。なお「私」が「弟の頭に出来たいくつかの瘤」につけてやつた「不可飲といふ薬」の「不可飲」とは、その塗り薬の注意書きであつて、薬の商品名ではなからう。

一—29 私には姉たちには可愛がられた。いちばん上の姉は死に、次の姉は嫁ぎ、あとの二人の姉はそれぞれ違ふまちの女学校へ行つてゐた。私の村には汽車がなかつたので、三里ほど離れた汽車のあるまちと往き来するのには、夏は馬車、冬は橇、春の雪解けの頃や秋のみぞれの頃は歩くより他なかつたのである。(二三)

いちばん上の姉は死に 源右衛門・タ子の長女タマ。明治二二年八月一〇日生まれ。同四〇年七月二三日、北津軽郡栄村大字湊字千鳥一五番地の平山茂三郎家から良太郎を婿養子に迎えたが、同四五年一月二六日死去。享年二四歳。同年三月一九日、それまで帳場をまかされていた良太郎は五千円を持たされて復籍し、のち齒科医になつたという。次の姉は嫁ぎ 次女トシ。明治二七年生まれ。大正二二年八月二日、二軒となりの雑貨店へ原の長男津島市太郎のもとに嫁いだ。一—23参照。あとの二人の姉 三女あいと四女きやう。あいはい明治三七年一月生まれ。大正一五年四月、北津軽郡金木町大字金木二四五番戸津島正雄(さきの「一軒置いて隣りの小間物屋」(一八)の次男。その長男の市太郎へは次姉トシが嫁いでいた。一—23参照)のもとへ嫁いだ。きやうは明治三九年一月の生まれ。昭和三年六月、青森市大字浜田八七番地の小館貞一へ嫁いだ。津島美知子筆録「マヤの懐旧談」(前出)には、「あいちゃんと京さんの祝言のときは嫁入り道具を運んだ。あいちゃんの嫁入り先は一軒おいて隣のへ原。へ原は屋号で津島のマキ(一族引用者注)だが、当時へ原は小間物や文房具などを手広く商い、旦那は郵便局長をしてなかなか栄えていた。へ原の長男にとしさんが嫁入りして、大正の末その弟にあいちゃんが嫁つたのだが、嫁入り道具の行列はへ原の玄関からへ原まで続いた。(略)／昭和三年京さんが青森一の小館材木屋のあんさまに嫁つたときの嫁入り道具は荷馬車十台、二日がかりで運んでこれまたのちのちまで話題になつた」とある。きやうが嫁いだ貞一の次弟の小館保は青森中学で太宰の二年後輩となり、のち弘前高校にすすんだ太宰が週末にきまつてやつてきて芸者紅子(小山初代)と浜町の小料理屋「おもたか」で遊ぶ相手をつとめたりした。小館善四郎はその三弟。「末娘のきやうは、両親にかわいがられて育ち、どこへ行くのも一緒だつたようだ。津島家の親類筋にあたる青森の豊田太左衛門の娘ちゑは、明治の末に、東京から帰る源右衛門を青森駅に迎えに行つたときのことをよく覚

えている。源右衛門とたねに手を引かれ、四つか五つのきょうが列車から降りてきた。きれいな被布を着ていた。東京みやげにバナナをもちだした。きょうと二人で食べたが、それが生まれて初めてのバナナだったという。『きょうちやは、かわいがられて、かわいがられて、腰ぎんちゃくでありましたよ』というちきは、バナナの味とともに、大地主の愛娘きょうを思い出すのである。「朝日新聞青森支局『津島家の人びと』」。「オガサが可愛がったのは京ちや（太宰の四姉）ぐらいのもので、あとの子供は修ぢやに限らず、余り可愛がってもらえなかつたようです」（「インタヴュー 越野タケ氏に聞く―子守をした頃の修ぢや」前出）。きょうは昭和二〇年一月一四日死去。享年四〇歳。『津島家の人びと』

一―30 會祖母は私が小学校を卒業する頃なくなつたが、白い着物を着せられ小さくかじかんた會祖母の姿を納棺の際ちらと見た私は、この姿がこののちながく私の眼にこびりついたらどうしようかと心配した。（二五）

會祖母 惣助（三代目）の後妻さよ。天保二二年八月一五日の生まれ。大正九年二月二四日逝去。享年八〇歳。「會祖母は私が小学校を卒業する頃なくなつた」とあるが、ちなみに太宰が金木第一尋常小学校を卒業したのはその三ヵ月後の大正一一年三月のこと。「

會祖母のさよという人は、會祖父の惣助が、身分相応の考えだとして、津島家の分家の小間物屋からめとつた嫁だったから、はじめから高貴な血統など、もつてはいなかつた。食うものも食わず、道に落ちてゐる馬糞まで拾つて、人からはケチンボだ、高利貸しだと、陰口をきかれながら、せつせと貯蓄して、ようやく今の身代を築きあげた人だった。／＼はで好きな養子の当主・源右衛門が、県下第四位の金満家にふさわしい邸宅の新築を思ひだしたときにも、とほうもない贅沢な普請に、血の出るような金を使うとは何事かと、のしり騒いだ、津島家の家系では、ただひとりのひとであつた。源右衛門は、当主の権限で、いやおうなく押しきつて、大邸宅を新築したが、そこに、移り住んでからも、さよは、源右衛門夫婦を、百姓家なみに「オド・オガ」（おやじ・おつかあ）と、昔ながらの津軽弁で呼ぶことを改めなかつた。／＼純粹の、金木新田部落の、商人の娘で、行儀作法も知らず、言葉遣いも荒々しく、津島家では、珍しく、「東北的蛮人の野性」を身につけていた人であつた」（「今官一『少年太宰治』前出」）。さよは、金木よりもさらに北、津軽半島の先端に近い寒村、相内村の生まれである。明治十七年に惣助の後妻として、津島家に入った。辛抱に辛抱を重ねた生活であつたらしい。惣助の死後、大邸宅に移つてからは、玄關わきの隠居部屋をあてがわれ、ひっそりと余生を過ごした。が、大地主の格式を強調する源右衛門の津島家の生活には、最後まで違和感を抱きつづけたようだ」（「朝日新聞青森支局『津島家の人びと』」）。祖母イシと対蹠的な位置を占める人物で、そのふさに育てられた姉とのへ負の連帯を「私」は強調する。

一―31 私は程なく小学校を卒業したが、からだがいからと言ふので、うちの人たちは私を高等小学校に一年間だけ通はせることにした。（二六）

小学校を卒業した 太宰治は大正一一年の「三月二十三日、六か年間全甲首席、男子三十四名、女子二十二名、計五十六名の総代で、

金木第一尋常小学校を卒業した」(山内祥史「年譜」、『太宰治研究Ⅱ』前出)。山内祥史「太宰年譜の虚実」(「解釈と鑑賞」昭44・5)には、「『金木郷土史』(金木町役場、昭和十五年八月十五日)によれば、太宰治の入学した尋常小学校の沿革は、(1)『明治八年五月創立、(略)金木小学校と称す』(2)『同十九年四月学制改正に依り金木尋常小学校と改む』(3)『同三十六年六月金木第一尋常小学校と改称』(4)『大正十三年度限り組合立明治高等小学校解散の爲め、翌十四年四月より高等科を併置し、金木第一尋常高等小学校と改む』(5)『昭和十一年四月金木尋常高等小学校と改め、第二・三両尋常小学校を分教場とす』となる。これによつてもわかるように、『金木』の名を冠する『小学校』は、太宰治入学の大正五年当時、(一)金木村大字金木菅原一九番地の金木第一尋常小学校(二)金木村大字川倉字七夕野五六の金木第二尋常小学校(三)金木村大字蒔田字桑元三の金木第三尋常小学校のの三校があつたわけである。(略)卒業時は、金木町立金木第一尋常小学校であつたはずだ」と報告されている。

いささかながい引用になるが、相馬正一『評伝太宰治 第一部』(前出)の説をひとまず掲げておく。「当時、金木第一尋常小学校の卒業生総代をつとめたものは決まって県立弘前中学校へ進む慣行があり、太宰の次兄と三兄もそれぞれ弘前中学校に進んだ。長兄も総代をつとめたが、大地主の総領であるために、父源右衛門の希望で同郡の五所川原農学校へ進んだ。開校以来の秀才と騒がれ、『神童』と噂された太宰が、『病弱』を理由に一年間足踏みさせられたという通説は、おそらく『思ひ出』の中の次の一文に由来すると思われる。(略)しかし、太宰が高等小学校で一年間学んだことは事実だとしても、それは決して『からだ弱い』からではなかつた。すでに見てきたように、一般民家の子供らに比して良家の子弟らしいひ弱さは感じられるが、六年間を通じて腕白と道化の評判が高く、とくに最後の二か年を無遅刻無欠席で通したほどの太宰が、

中学に進学できないほど『病弱』であるはずがなかつた。(略)にもかかわらず、その後機会あることに自伝的作品の中で太宰は幼少時の自身を、『私は病身だつたので、寝ながらたくさんの本を読んだ』とか、『腺病質の子供として……不眠症に悩まされた』などと語っているのはなぜであろうか。／考えられることの一つとして、太宰が事実を明かすことによつて津島家の權威を失墜させ、肉親の恥辱を衆目にさらす結果になることを懸念したことが挙げられる。というのは、金木小学校を『首席』で卒業した次兄と三兄が弘前中学に進んでからはいずれも学業の不振に悩み、ついに二人ともそれぞれ中途退学して東京の市立中学に転じたという事情があり、そのため父源右衛門は大事をとつて、学力補充の目的で太宰を高等小学校に一年間通わせることにしたのである。ただ付言しておけば、はたして「太宰が事実を明かすことによつて津島家の權威を失墜させ、肉親の恥辱を衆目にさらす結果になることを懸念し」て虚構化したとまでいえるかどうか。相馬自身も「あるいは、作中の主人公を虚弱体質の人物として設定することによつて、創作上の別の効果をねらつたものであろうか」と言いそえているように、やはり自己劇化の問題を抜きにはできないように思う。「自伝的作品の中」にかぎらず、そのような自画像は一貫して見られるからである。「思ひ出」に即してみても、いわゆる世間的な生活力における弱者は、「からだ弱い」ほうがふさわしい。なお、この相馬説をめぐるのは山内祥史「太宰年譜の虚実」(前出)が、「欠席がすくない、あるいは無欠席であつたことが、そのまま直線的に、『病弱』でなかつたことに連らなるであろうか」と「疑念」を呈し、また塚越和夫『評釈太宰治』(葦真文社、昭57・8)は、「私にはごく単純素材に記録の信憑性への疑問がある」と述べるなどしている。

1-32 この時分には、私の村にも町制が敷かれてゐたが、その高等小学校は私の町と付近の五六ヶ村と共同で出資して作られたものであつて、まちから半里も離れた松林の中に在つ

た。私は病気のためにしじゅう学校をやすんでゐただけれどその小学校の代表者だったので、他村からの優等生がたくさん集る高等小学校でも一番になるやう努めなければいけなかつたのである。しかし私はそこでも相変らず勉強をしなかつた。いまに中学生に成るのだ、といふ私の自矜が、その高等小学校を汚く不愉快に感じさせてゐたのだ。

(二七)

私の村にも町制が敷かれてゐた。金木村の町制施行は太宰が尋常小学校を卒業する二年前の大正九年の二月のこと。その高等小学校

「四月一日、学力補充のため、金木町郊外の大字金木字野蘆の松林の中にあつた、金木町と近郊三村(嘉瀬・喜良市・武田)引用者注)による組合立明治高等小学校に入学し、一年間通学した。この明治高等小学校には近郊の六尋常小学校から優秀な者が集まり、出身校ごとに集団化して、学業に、いたずらに、覇を競つていたという。一学年が二組。優秀な者だけで編成される一組に入った。高等小学校でも持ち前の茶目つ気を發揮、時には他町村出身の集団と対立して、首領的存在になつたとさえいわれている」(山内祥史「年譜」、『太宰治研究Ⅱ』前出)。

私の自矜 この典型的なナルシストの「私」(より厳密にいえば、語り手たる「私」によつて語られた自画像としての「私」)は、「他人が自分をどう見ているかに左右されるために、恥や屈辱感などに敏感である」(中西信男「ナルシズム―天才と狂気の心理学」講談社現代新書、昭62・11)。尋常小学校を卒業すると一部の生徒は中学(五年間)へ進学したが、他の多くは経済的な理由などから高等小学校(二年間)へすすむか、あるいはそのまま家業に従事したりした。「いまに中学生に成るのだ、といふ私の自矜」は、ここに由来する。中学進学者の選良意識が、「その高等小学校を汚く不愉快に感じさせてゐたのだ」。

一―33 長兄はそのと結婚して、祝言の晩に私と弟とはその新しい嫂の部屋へ忍んで行つたが、嫂は部屋の入口を脊にして

坐つて髪を結はせてゐた。(二八)

長兄はそのと結婚して 「文治が黒石の名門、岡崎家から花嫁を迎えたのは、大正十一年の春、桜が咲きはる五月初めのことであつた。岡崎家は、津島家よりも小さな地主だが、当主春次郎の息子や娘たちは、一高、東大を出て満鉄に勤めていたり、東京・目白の日本女子大の先生をするなど、頭のいい一族として知られていた。花嫁れいは十七歳、十人兄弟の九番目で、目白の女子大に通つてい

た。新興地主津島家の縁談の相手としては、家柄も育ちも、申し分のない相手である。(略)／話を持ち込んだのは、津島家の出入りの商人、中畑慶吉であつた。五所川原の大きな呉服商(飛鳥(いまの(デパート)の番頭である。明治の末から、大きなふるしき包みに反物をかついで津島家を訪れ、源右衛門にすっかり気に入られていた。その中畑が書き残した備忘録によれば、源右衛門から嫁をさがすように頼まれ、大正十年の秋のある日、岡崎家の仏事があつた時に、文字を連れて寺の玄関で待ち受け、墓参するらしい姿を木陰から見たのだという。文治は、二十三歳、早大生だつた。『これならば』ということ、縁談が進められた。／仲人は、(の主人、飛鳥裕吉、キク夫妻に決まつた。(略)／祝言は、十五畳の部屋四室をぶちぬいた大広間で行われた。庭にも、広いたたきにも、見物の人たちがつめかけていた。料理人は青森から呼んできて、一の膳、二の膳、三の膳まで運ばれた。青森、弘前から芸者も五人呼んできた。真は二日二晩続く」(朝日新聞青森支局「津島家の人びと」前出)。

一―34 冬ちかくなつて、私も中学校への受験勉強を始めなければいけなくなつた。私は雑誌の広告を見て、東京へ色々な参考書を注文した。けれども、それを本箱に並べただけで、ちつとも読まなかつた。私の受験することになつてゐた中学校は、具でだいいちのまちに在つて、志願者も二三倍は必ずあつたのである。(略)勉強中は、たみといふ女中を

傍に置いて、火をおこさせたり茶をわかさせたりした。(二九)

中学校への受験勉強 「現実の太宰は、この学校で担任教師傍島正守から受験準備のために作文・読方・算術の個人指導を受けることになる。当時、傍島教師は叔母きゑの次女ふみと結婚していて津島家とは姻戚関係にあったので、太宰の受験指導には特別に力を入れていた。にもかかわらず、この学校での太宰は『思ひ出』の主人公同様あまり勉学に熱心ではなかった。授業中にもふざけすぎる事が多く、そのために担任教師以外からは快く思われていなかった。とりわけ、修身(道徳)を教えていた校長福士勇は、津島家の権威を笠に着るような太宰の不謹慎な態度を憎み、修身と操行の二科目を『乙』と評定した。これまでの習慣からいくら怠けてもいくら悪戯しても全甲首席になれるとおもっていた太宰にとつて、それは大きなショックであつたらう。(略)このあたりから太宰の性意識は読書に刺激されて急激に昂まり、すでにオナニーの虜にすらなつていたようである。傍島教師は学習意欲を喪いかけている太宰の学力を懸念して、ついに受験校を弘前中学(旧県立一中)から青森中学(旧県立三中)に変更せざるを得なくなつた」(相馬正一『評伝太宰治 第一部』前出)。荒川法勝『太宰治の生涯』(泰流社、昭和54・6)には、「治が青森中学校を選んだのも、弘前中学校は試験が難しかったためらしい。その頃、青森県下の中学校のランクは弘前、八戸、青森の順であつたという(昭和五十三年六月二十五日号『サンデー毎日』太宰治ゆかりの人々は、いま)。すると、治が明治高等小学校に一年在学したのは、やはり学力補充のためであり成績も、それほど抜群ではなかつたということになるらしい」とある。参考書を注文した二軒となりの親戚の雑貨店(原(やまはら)ではへ源のツケで買えたというので、ここを利用したものか。一一三参照。県でだいいちのまぢ 青森市。「思ひ出」全体には、大小とか優劣、美醜、序列などを気にし、こだわらる眼が伏流してい

る。もとよりこれが、「私」のへ負の位置づけをうむ方眼紙となる。「上の姉の学校は下の姉の学校よりも小さいまぢにあつたので、お土産も下の姉のそれに較べていつも貧しげだつた」(二四)とあるように、町の規模の大小にも、ある文化的な意味づけがほどこされている。だみといふ女中 未詳。

一一三五 その翌春、雪のまだ深く積つてゐた頃、私の父は東京の病院で血を吐いて死んだ。ちかくの新聞社は父の訃を号外で報じた。私は父の死よりも、かういふセンセイシヨンの方に興奮を感じた。遺族の名にまじつて私の名も新聞に出てゐた。父の死骸は大きい寝棺に横たはり横に乗つて故郷へ歸つて来た。(三〇)

私の父は東京の病院で血を吐いて死んだ 大正一二年「三月四日、東京市神田区小川町三十三番地佐野病院に入院中であつた父源右衛門の容態が險悪となり、午後四時、ついに不帰の客となつた。享年五十三歳。貴族院議員在任わずか四月目の出来事であつた。当時、父源右衛門は、金木銀行取締役頭取、日本勧業銀行青森支店顧問、鳴海銀行、青森日報、小館木材各取締役、松木屋具服店相談役などの役職にあつた。同日付をもつて、正四位勲四等に叙せられ、旭日章を贈られた。また、同日長兄文治が家督を相続した。父源右衛門の遺骸は、五日、ひとまず府下東大久保二百三十四番地の別宅に収容され、同夜、母夕子、長兄文治夫妻他親戚知人が集つて通夜。六日、午前二時に告別式を行い、午後一時、多数の見送りの中上野駅発。七日、午前六時三十分青森着、午後三時三十分五所川原駅着、そこから馬橋十台で金木の自邸に移送、午後八時三十分自邸に入った。これより先、金木では、多くの人々が町端れに堵列し、遺骸を迎えた。三月九日、十日付の『弘前新聞』は、死因を『肺臓癌腫』と報道した。三月十九日、十二時、十余名の僧侶が読経をはじめ、午後一時半、自宅を出棺、雪路の中、沿道には、小学校全校生徒、青年団、消防団等が堵列して見送り、金竜山南台寺で、葬儀がとり行わ

れた。会葬者は一千余名の多数であった。金木始まって以来の盛儀で、すでに十一時頃、自邸附近は往来もできぬような雑踏を呈し、警官が出動して整理にあたつたという」(山内祥史「年譜」、『太宰治研究Ⅱ』前出)。この源右衛門の死をめぐる「東奥日報」の連日の記事については相馬正一『若き日の太宰治』(前出)が詳しく紹介してくれている。

『トクセイシヨンの方に興奮を感じた』このあとも語り手の「私」は、「私は皆の泣き声を聞き、さそはれて涙を流した」(「三一」と語るなど、いかにもそれらが特異なことに属するかのような口ぶりだが、さして「私」だけに特殊な性向というわけのものではない。もとより語り手は、それを承知で「私」を孤立させ、その「私」をよく理解してくれるはずの読者のそれぞれと親密な関係をとり結ぶ。すでにこれ以前に「私」の境遇や父との関係が語りつくされているのだから、「私」が「父の死よりも、かういふセンセイシヨンの方に興奮を感じた」ことに、なんの不思議もない。

付記 本稿は「『思ひ出』一章(上)」(九州大学教養部「文学論輯」33、昭62・12)につぐものである。「」内の数字は「思ひ出」全体に付した形式段落ごとの順番を示す。なお「思ひ出」本文は便宜的に筑摩全集類聚版のものによつたが、初出誌以外の、初版本以下の諸本の本文は参照した。

——九州大学教養部助教授——